

## 生活科における探究的な学び

- 【研究代表者】谷尻 治 (和歌山大学教職大学院)  
【共同研究者】田中伸一 (和歌山大学教育学部附属小学校)  
上田 恵 (和歌山市立教育学部附属小学校)  
赤松広志 (和歌山市立雑賀小学校)  
赤井素子 (和歌山市立宮北小学校)  
南 拓哉 (海南市立内海小学校)

### 1. 共同研究課題について

#### 『生活科における探究的な学び』

探究的に学び続けていくことができる生活科授業を実践するための授業・単元作りを検討及び検証していく。特に、探究力と省察性を育む指導のあり方に焦点をあてる。

子どもが繰り返し関わりたくなる「ひと、もの、こと」と季節や旬を逃さない出合いを演出する。失敗しても何度も繰り返して試す中で、それぞれの子どもが前回とは違った課題を持ち、関わり方が変化していくことと、気付いたことを表現する活動を充実させることで、自己の認識を確かなものにしたリ、無自覚だったものが自覚化したりして、気付きの質を高めていくことが、低学年の探究の姿である。さらに、それぞれの気付きの違いに目を向けさせ、感じ方や考えの違いを認識させ、「ひと、もの、こと」へのよりよい関係づくりを指導し、体験したこと、気付いたことを自分の生活や他の学習に活かせるように支援する。(2020年度和歌山大学教育学部附属小学校「生活科提案」より引用)

### 2. 今年度の活動

共同研究メンバーの「生活科」に関連する主な活動は次の通りである。

#### (1) 公開授業研究会開催時の相互参観・協議会参加等

\* 下線は授業者、下線なしは助言者と共同研究メンバー参加者。

- 8月 3日 附属小学校にて生活科の授業「色水づくり」(田中・谷尻)  
9月 11日 附属小学校にて校内事前研。生活科「土あそび名人」(田中・上田・谷尻)  
10月 9日 共同研究メンバーによるオンライン事前検討会(田中・上田・赤松・南・谷尻)  
10月 16日 附属小学校にて生活科の授業「〇〇あそびのヒミツを紹介」(田中・谷尻)  
10月 23日 附属小学校にて開催の「教育研究発表会」・生活科「土を使ってつくろう ～かまど作り～」公開授業。(田中・上田・赤松・南・谷尻)  
10月 31日 附属小学校にて開催の「教育研究発表会」・オンライン研究協議会(同上)  
(2) 講演会

2月 20日 和歌山大学にて石堂裕氏講演会&実践発表会をオンラインで開催。今年度の実践「土を使ってつくろう ～かまどづくり」を田中伸一教諭が発表。

### 3. 共同研究者実践概要

#### 単元名『土を使って遊ぼう』『土を使って作ろう～かまど作り～』

実践者：田中伸一(和歌山大学教育学部附属小学校1年A組)

#### 単元について

本実践は、『土を使って遊ぼう』『土を使って作ろう～かまど作り～』という単元2つで構成している。1つめの単元で、土を使った〇〇遊び名人になることを目指した。活動の中で、〇〇遊びに適した

土を見つけ、場所による土の性質の違いに気付くことを狙いとした。

2つめの単元では〇〇遊びを通して土について学んだことを生かし、私たちの今の生活に生かすことができる土かまど作りを体験し、更に土を身近に感じ、土に親しむ態度を育てることを狙いとした。

### <子どもたちの現状>

栽培活動の苗植えの時、土の表面は熱いが、土を掘り進めると温度が下がっていることや、土をギュッと握ると固まることに気付く嬉しそうに話していた。しかし、子どもたちが土を触って遊んでいる様子を見ることはそれ以降にはなかった。栽培活動において身近である土が、子どもたちにとって身近ではない。だから、土にもっと親しませたいと思った。

### <単元計画>

土を使って遊ぼう 単元計画（全10時間） 第1次 土ってどんな感じ？（3時間） ・土ってどこにある？どんな遊びをしよう？ ・色々な場所にある土を感じてみよう 色々な場所の土を並べて、触って、嗅いで ・土がある場所に行こう 第2次 土遊び名人になろう（4時間） ・土を使った遊びを楽しもう（団子、山、水流し、宝隠し、形づくり、泥水づくりなど） ・遊んで、感じて、交流しよう ・土遊びを工夫しよう、交流しよう ・土遊びを工夫しよう 第3次 1A おすすめ土遊び大会をしよう（3時間） ・遊び方紹介カードを作り、紹介する ・色々な遊び方で楽しむ
---

土を使って作ろう～かまど作り～ 単元計画（全14時間） 第1次 もっと楽しく遊ぶには？（1時間） ・作ったかまどを使って調理したいな 第2次 土を使って調理しよう ～秋の野菜をいただく～（11時間） ・収穫野菜をどうやって食べようかな？ ・どんなかまどを作ろう？ ・かまど作りに適している土を見つけに行こう、試してみよう ・かまど作り名人登場！ ・かまどを作ってみよう ・かまど作りについて交流しよう（1回目） ・かまど作りを工夫しよう、交流しよう（2、3回目） ・かまど作り名人に尋ねよう ・かまど作りを工夫しよう（4回目） 第3次 作ったかまどで秋野菜パーティーをしよう（2時間）
---

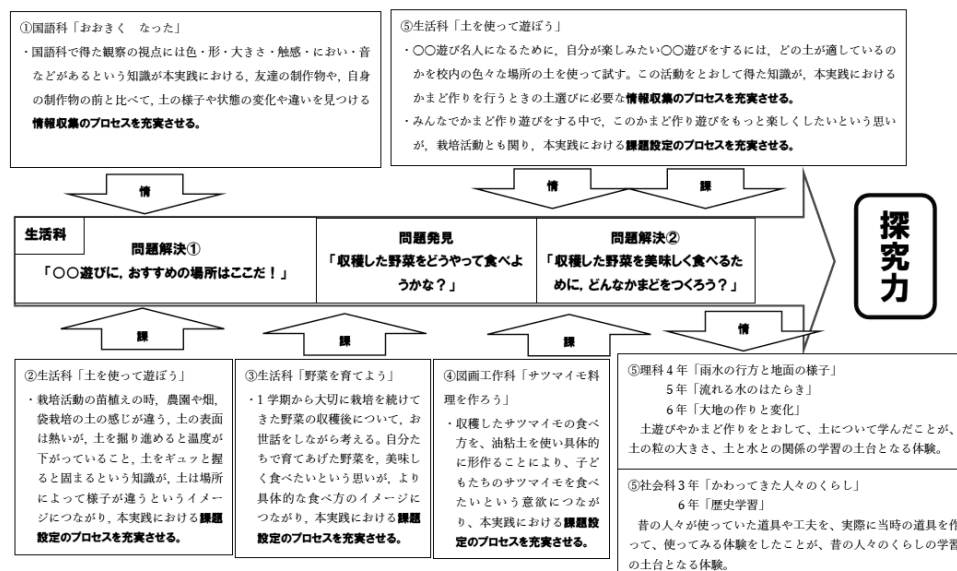
### <カリキュラム・デザイン>

研究授業

第1学年、生活科、指導者：田中 伸一

単元名：「土を使って作ろう～かまど作り～」

【各教科・領域において習得した知識（内容知識・方法知識・体験知識）の活用・発揮が促され、互いの探究のプロセスが充実していくイメージ】



生活科での単元のつながりを意識することで、子どもたちの思いがつながり、継続して取り組むことができるようにした。加えて、「土」をテーマにした土遊びやかまど作りの体験は、理科4、5、6年生の「土の粒の大きさ」、「土と水との関係」の学習における土台となる体験として、つながっていく。

社会科においては、3年生と6年生の昔の人

々が使っていた道具や工夫を、実際に当時の道具を作って、使ってみて感じた大変さや昔の人の知恵に対する思いや体験が土台となり、昔の人々の学習につながっていくと考えた。

### 実践について

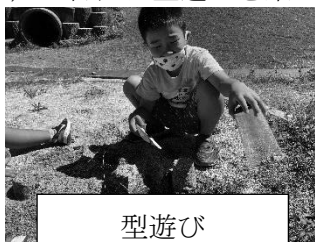
6月

栽培活動（サツマイモ、夏野菜）を開始する。土に穴を掘り、苗を植える。

8月

#### ・土ってどこにある？どんな遊びをしよう？

2学期の学習は「土を楽しむ」ことから開始する。校内（築山、滑り台下砂場、運動場、運動場砂場、畑）で自由に土遊びを楽しむ。まだ積極的に土に触わる・土遊びに取り組めない児童もいた。



型遊び



模様作り



川作り

9月

何度か土遊びを楽しむ活動を行う中で、色々な土遊びに慣れてきたころ、「割れない泥団子の作り方見つけた。」「早く流れる川を作れる場所見つけた。」など子どもたちがそれぞれの遊びのコツを見つけ始めた。友達のこういった話を聞く中で、全員が土に触れ、土遊びを楽しむようになってきた。そこで、〇〇遊び名人になるために、〇〇遊びにはどの場所の土がオススメなのかを調べて、紹介する活動を行うことにした。

#### ・色々な場所にある土を感じてみよう。色々な場所の土を並べて、触って、嗅いで

子どもたちが土がある場所を見つけ、その場所の土を集めてきた。まずは、場所によって違いがあるのか調べる。目で見て、触って感じたことは…

- ・土の色が違う
- ・粒の大きさが違う
- ・場所によって採ってきた量が違う
- ・手で触ると、サラサラやトゲトゲしたものがある

カップに入れて集めてきた土を調査したことを、確かめに、色々な場所に土の観察に出かけた。



#### <土遊び名人になろう>

・土を使った遊びを楽しもう（団子、山、水流し、宝隠し、形づくり、泥水づくりなど）

#### ・遊んで、感じて、交流しよう

〇〇遊び名人になるために。1人1人が〇〇遊びに適した土を、土遊びを楽しみながら見つけた。子どもたちが選んだ遊びは5つ

①泥団子作り ②川作り ③山作り

④お店屋さん ⑤かまど作り（毎日、日本昔話などの昔の生活が分かる昔話を見せていたため。）

それぞれの遊びを、校内の色々な場所で試し、遊びに最も適している土の場所を見つけていく。遊んだ後

は、教室で発見したことを交流した。交流を行う中で、遊びの場所を変えたいと思う子どもが現れた。その子どもに、次の3つのことを尋ねた。①〇〇遊びをどこでやったのか、②どうしてその場所でやってみようと思ったのか、③どんな〇〇遊びにしたいのか。以下（遊びの場所が変わった人）のような返答があった。

#### <遊びの場所が変わった人>

初めは自分が好きな場所で土遊びをしていた子どもが、何度か〇〇遊びをする中で、場所を変えたいと思うようになった。例として、泥団子作りに取り組んだ子どもの返答。

①築山で泥団子作りしたい、前は運動場で泥団子作りをした。

②築山で泥団子作りしている人の泥団子が大きかったから。運動場では、泥団子を作ってもすぐ崩れてしまった。

③大きい泥団子を作りたい。

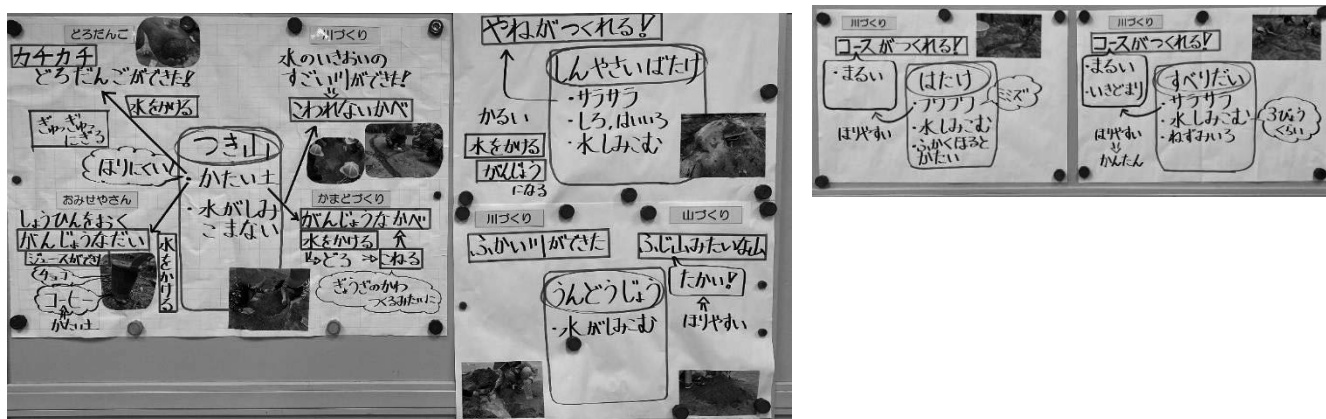
交流を通して、場所による違いが明らかになってきた。〇〇に適している土か、水の染みこみややすさ、形作りの容易さ、形を保持することができるのかなど。再度、土遊びを試す中でも、「築山の土と、さら砂（さらさらした砂）を交互にかけると、硬くなる。」「水をつけて、作ると、乾いた時硬くなる。」「できたから、このまま置いておこう。明日になるともっと硬くなるから。」といった声が聞かれた。泥団子作りをしながら、たくさんのことを考えている姿がみられ、アドバイスしながら行っていた。



#### ・〇〇遊び名人を通して、それぞれの土の特徴をまとめよう

色々な土遊びを楽しむ中で、土に特徴があることに気付いた。それぞれの遊びを紹介した後、みんなで紹介してもらった土で土遊びを楽しんだ。

#### 場所による土の特徴まとめ



10月

#### ・サツマイモの収穫

6月に苗を植えてから、収穫を楽しみにお世話してきた。10月に入り、サツマイモの収穫時期が近づいてきた。サツマイモを1本だけ収穫し、どうやって食べようかと子どもたちの思いを膨らませる。

大きく育っているサツマイモを見て、子どもたちは「早く食べたい。」「おいしそう。」「焼き芋にして食べたい。」「スイートポテトがいい。」「大学芋。」「イモ天。」と食べたいという思いを膨らませて話していた。そこで、食べたい料理を、油粘土で表現した。



#### ・収穫したサツマイモをどうやって食べようか？

子どもたちは早く食べたいという思いで、焼き芋、スイートポテト、大学芋、芋天と自分が食べたいサツマイモ料理を話す。食べたい料理が決まった時、「何を使って料理する？」と聞くと「かまど！土遊びで作ったことあるから！」と発言があり、自分たちでかまどを作って調理することにした。

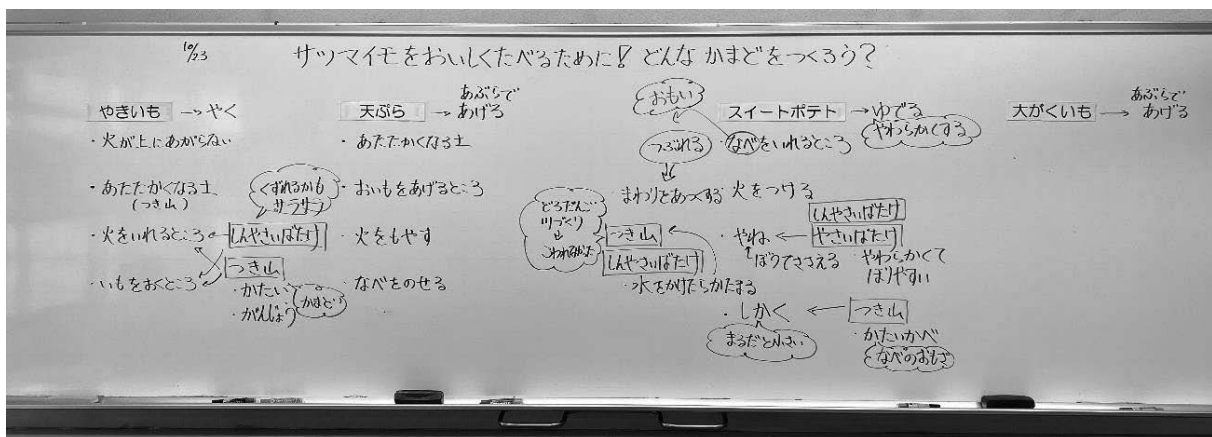


土遊びで作ったかまど。最終的に屋根を作った。しかし、火を入れる所と、調理するモノを入れる場所が一緒になっていたり、屋根を作るために軽い砂（サラサラした砂）を使っているため、すぐに崩れてしまう。

#### ・どんなかまどを作ろう？

自分が食べたい食べ方をするために、適しているかまどの形を考えた。そのかまどを作るためには、どの場所の土を使うかも、前回の「土遊びの経験」をもとに考えていく。

子どもたちは、「鍋を乗せても崩れない壁を作りたいから、築山の土を使うよ。」など土遊びの経験をもとに話し合った。



粘土で作ったかまど模型に、鍋を乗せてみると……、鍋の重みで潰れた。みんなで原因を考え、解決するためのアイデアを出し合って、「鍋は重いから、もっと壁を厚くしよう。」とまとまった。



そこで、みんなでもう一度チャレンジ。成功すると、みんなから「うおー」という声が！ 探究的な学びの成果が見事に現れた瞬間であった。

これらの体験と学びをいかして、いよいよ土を使ってかまど作りにチャレンジ！

11 月

・「大きなかまど、どうやって作ろう？かまど名人登場」

粘土で模型を考えた子どもたちが、次に直面した問題は大きいかまどをどうやって作るのかである。そこで、かまど作りの名人に作り方を教えてもらうことにした。かまど名人はかまど作りの土を持ってきてくれて、自分たちが使おうとしている築山（赤土）と見比べ、触ってみた。

・かまど作り

1人1人がトレーを手に、使いたい土や材料を集める。全部よく混ぜて、団子ブロックを作り、積み重ね、かまどの形を作っていく。

築山（赤土）＋砂（運動場、砂場、畑）＋枯れた竹の葉（藁がいいと聞いて、似たものを探す）

「土をよく練ると、粘土みたいに滑らかになる！」

「たくさん練った方が、乾いた時、ひび割れしにくいね。」

「築山だけだと、ひび割れしてる。」

「藁（枯れた竹の葉）入れてみる？」

乾燥した団子ブロックの様子を確かめながら、試行錯誤しながら完成させていく。



1人1人が、団子ブロック（丸い団子の形を作る）の配合を考えて作っているため、できたものは色や手触りが違う。数日置いて乾燥させた後、観察するとひび割れているもの、カチカチになっているものと違いが出た。子どもたちは、「〇〇さんの団子ブロック、ひび割れないね。どうやって作ったの？どこの土混ぜたの？」と友達に尋ねながら、ひび割れない団子ブロックを作っていた。



・紀伊風土記の丘へ、かまど調査へ！

かまど作りや、秋の校外学習（ドングリを拾い。家で実際に食べてみる人がいた）を通して「昔の人はどんな生活をしていたのかな？」「自分たちが作っているかまどと似ているのかな？」子どもたちが疑問を持った。そこで、かまど作りの合間をぬって、紀伊風土記の丘に調査に出かけた。土を



使って作っていたものは、かまどだけではなく、土壁もあり、自分たちの生活に深く関わっていることに気付いた。

12 月

・完成&かまどパーティーの開催

完成したかまどを使い、かまどパーティーを開催した。



1 月

・かまどで餅つき&鏡餅作り

かまどを使い、お正月に関わりの深いお餅をテーマに、餅つき、鏡餅作りを体験する。「もち米を蒸すためには？」という問題に、子どもたちから「火を使うならかまど使わないと！」の声！自分たちの生活における火を使う場面でも、かまどを用いることができるようになる姿が見られた。彼らにとって、土で作ったかまどは身近なものになってきているのかもしれない。



<この学習を通して>

土についてたくさんの発見をすることができた。

土は、握る、混ぜるなど手を加えることにより手触りや色などさまざまな変化があり、土遊び・かまど作りをとおして、それぞれの場所の土には違いがあることに気付くことができた。自分が作りたいものや、自分の思いに合った目的に応じて、適した土を選ぶことができた。

「土遊び」を通し、親しみを持つようになった土を使い、私たちの今の生活にも生かすことができる体験をとおして、更に土を身近に感じ、土に親しむ態度を育てることができた。

#### 4. 本実践の成果

特筆すべきは、この実践が、ヒトの進化・人間の発達筋道を見事にたどりながら、進められている点である。水→土・泥→土で道具作り→火の使用（かまど）→サツマイモを焼いたりゆでたり→餅つきという流れは、まさに人類の進化／文化の発展と一致している。生物のヒトとして備わっている、子どもたちの「好奇心」をおおいにくすぐったに違いない。

幼児期の「学びの芽生え」から児童期の「自覚的な学び」へ、常に「どうすればもっと上手く出来るようになるか」と問いを立て続け、子どもたちが試行錯誤しながら次のステージへと進んでいる。その裏に、具体物を使って自分の考えを表現（Representation）し、全身を使って活動するといった豊かでリアル（Real）な体験活動と、他者との交流（Relationship）が繰り返し（Retry）行われている。まさに、附属小学校「生活科提案」の主張する4Rを実現した探究的な学びの典型といえよう。